

自らの経験から

静岡県立下田高等学校 二年 若林 和海

下田といえば何を思い浮かべるだろうか。下田は、人柄が温かく、郷土愛にあふれた市民のもとで、毎年伝統のある祭典が行われ、四季折々の植物・自然が存在する。下田を代表する美しい碧海には、踊り子号やロイヤルエクスプレスの運行などにより、関東圏から多くの観光客が訪れる。私はそんな下田が大好きだ。

しかし、同級生の多くが「早く下田を出たい」、「都会に住みたい」と口にしてるのをよく耳にする。実際、下田市の人口減少は甚だしく、過疎化が進んでいるのは事実だ。こんなにも魅力で溢れ、温かい街であるのに。

ある日、友人に聞かれた。「なんで和海はそんなに下田が大好きなの？戻って来たいと思うの？」と。その答えを考えた時、私の中で大きな理由があった。それに触れながら、下田の未来について語りたと思う。

まず一つ目に、私の祖父は、中学理科の教諭であり、私が幼い頃、よく外に連れ出し、伊豆の自然について教えてくれた。恵比須島の海底地層や、菖蒲沢海岸の石英岩、それぞれの浜の砂の特徴など、幼い私にたくさんの知識をくれた。また、理科だけではない。下田の伝統ある今村伝四郎の歴史や、幕末の町内など、学校では教えてくれないことまで教えてくれた。

さらに、小学生からの郷土学習も欠かせない。下田市内を回る街探検をはじめ、下田の歴史を知るきっかけとなるシンポジウムなど、様々な方向・手段で下田と関わった。私自身、伊豆半島がジオパークに認定された際、審査員の方へのプレゼンテーションも行った経験もあり、幼い頃から下田についてたくさん触れて来たことが、今の愛着へと繋がっていると感じる。

二つ目として、下田市民の温かさだ。街に出れば、必ずどこかで知り合いに出会う。知り合いでなくても、登下校中には、挨拶が交わされ、「行ってらっしゃい」「お帰りなさい」という言葉をくれる。久しぶりに会うと、「大きくなったねえ」と声をかけてくれる近所の方や、自主的に横断歩道に立って、私たちの安全を見守ってくださる協力隊の方々。小学校では、日頃私たちを見守ってくださる地域の方へ感謝の気持ちを伝える「感謝の会」が開かれたり、中学校では、街を彩るべく、学生が菊の花を種から育て、至る所に寄贈するという活動も行われたりした。こんなにも、地域包括的な安全があり、地域と学校が盛んに交流し合う街はそうないと思う。下田にいるというだけで感じられるこの温かさが大好きだ。

そして、下田が好き、ここにいたいと思う私が思う最も大きな理由は、自分が生まれ育ったこの下田で子育てをしたいと強く思うからだ。田舎ならではの温かさはもちろん、身近にある自然からたくさんの知識を得られ、自らの経験からの学習ができる。ペリー来航で日本史に大きな変化をもたらした歴史も存在し、それに伴う黒船祭では、異文化交流が行われ、国際親善を学ぶこともできる。この良さは下田でしか感じるこのできないものだと思う。

確かに下田が住みにくいという意見も理解はできる。東京都心まで車で三時間、職種も限られている。しかし、未来の下田はどうだろう。今現在、建設途中の伊豆縦貫自動車道。この道が下田にもたらす影響はとても大きいだろう。沼津～下田間は約一時間で移動できるようになることから、交通の便は格段に良くなる。少し離れた場所への通勤、通学や、沼津市付近への外出も容易になるだろう。また、日本の生活スタイルは徐々に変化しつつある。情報通信技術が進化したことから、情報は飛び交い、ネットショッピングも可能になり、日本中どこにいても同じサービスが受けられるようになった。さらに、テレワークを導入する企業が増加したことから、好きな場所での仕事が可能になった。これらの変化は下田に住みにくい原因を変えてくれる存在であるに違いない。

私の将来の夢は、この大好きな下田の地域活性化に貢献することである。私の幼少期の経験や、この魅力を次世代にも繋げていきたい。こんなにも魅力があって、可能性で溢れる下田。そんな下田をもっと有名に、もっと人で溢れる街にすること。それが私の夢だ。これからの下田の未来に期待をして、今は勉学に励み、必ず下田に戻って来たい。